

私たちの「リアル」を物語にできるか～特集のあとがきと『太陽を曳く馬』書評に代えて～

全曹青広報委員長 板倉省吾

全

曹青で広報委員会に携わって5年になるが、実は、その間にいくつかの「誘い」を受けた。それは「アニメやネット配信コンテンツを制作しないか」というものだ。

青年僧としての教化手段の志向とこれらの現代的と言えるメディアとの相乗を期待して、実際にシナリオ制作まで行った例もあったが、財政面等実現へのハードルは非常に高く、成果として結実しなかった。その間に私が最も苦慮したのは「私たちがメディアを利用して何を発信するのか」、その「発信の質」だった。

手段だけを変えて、その内実は従来からの教説を記号的になぞったりコピーしたのでは意味がない。現代において「リアル」な問題意識とその糸口を示す、というテーマ選定の難度も然ることながら、それらの要素をナラティブに繋ぎ合わせ、しかも直接的なターゲットと思われる「宗教的浮動層(寺檀関係でなくメディアを介する、若者を中心とした教化対象)」の関心を惹かなければならない。そんな物語を創作する源泉が、果たして我々にあるのかと、茫洋とさせられた。考えるだけで宙を掴む思いに駆られた。

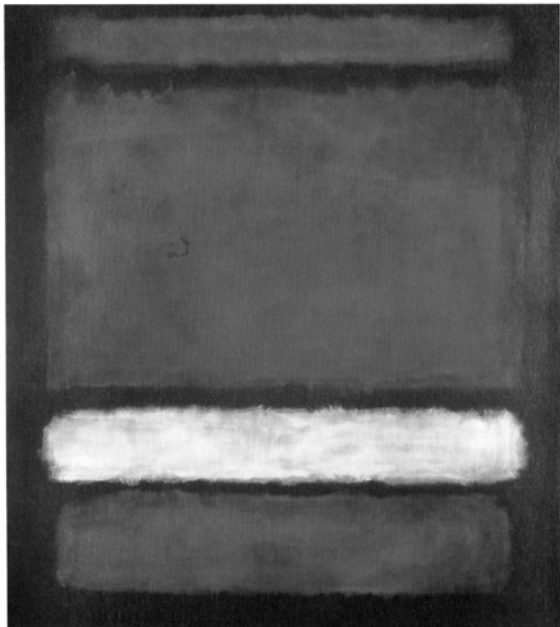
その意味では昨年、曹洞宗が題材となった物語が一般のメディアに乗って発信される好例にいくつか出会えた。それが今回特集で取り上げた映画『ZEN』と『GATE』であり、また高村薫氏の小説『太陽を曳く馬』の単行本化だった。

『太陽を曳く馬』の子細な内容に触れる紙幅はないので、興味があればご一読頂くほかないが、花形のミステリー

作家だった氏が「小説の中で人を殺せなくなったインタビュー談」のは、ご自身も被災した1995年1月の阪神淡路大震災の体験からだそう、その後10年間、曹洞宗侶・福澤彰之とその血族の大正・昭和・平成にわたる100年の物語を書いてきた。今作では彰之の実子が犯した殺人事件と、都心の肉山寺院が運営し彰之が代表を務めたサンガでの雲水の轢死が物語の軸になっている。卓抜した筆致や取材力に言うに及ばずだが、驚愕したのは、雲水の死の背景に、サンガ内に『正法眼蔵』7巻本と12巻本それぞれに依拠した、法論「があったこと! 確かに近年の宗門にもたらされた「根本分裂」の誘因子ともいえる命題の一つだが、まさかそこから物語が紡げるとは…。一見超俗的にみえるサンガであるが、その全体性

の解れ目には個の主張や吐露、人間的な営為と交感が渦巻く。それを彼の法論から導き出す手腕には脱帽した。小説の成否が「サンガの描写がリアルか」を基準におくならば、実態よりもよりラディカルな加飾が、サンガの「求道集団」としての本懐に肉迫している。

ただ、これもプロットの一つではない。最も重要なのは、僧俗を問わずに登場人物の底流に共通体験としての「オウム真理教」や「9・11」を脈々と滲えていることである。これは青年会の年齢層にとっても「極めてリアルな宗教体験」ではなからうか。人は何故信じるのか、何故殺めるのか。聖俗とは何か。あらゆる「問い」がむき出しになり、世界中の聖性が相対的地平へ舞い落ちた、あの時…。それは正に、仏教にとつては焼き入れのような鍛錬・補強の時期



太陽を曳く馬



高村薫

(c)2009 高村薫 新潮社

『太陽を曳く馬』

高村薫 著
発行元◎新潮社
2009年7月発売
価格◎上下巻ともに
1,890円
「晴子情歌」「新リア王」
(第4回親鸞賞受賞)
続く3部作の完結編。

だったと言えないだろうか。懸命にオウムとの教義の「仕分け」をする過程では、寧ろ仏教自体の持つ神秘性や反社会的な側面にも目を向けざるを得なかった。しかし「9・11」に至って、他の宗教にない「善悪」を峻別しない特徴が、自らへの信仰への新たな裏づけを与えた。今、仏教に隣接するあらゆる物語・題材は、あの時期を基点にしなければ「リアル」を露さない。そのことを再確認させられた。

物語には時系列による展開があるが、我々宗侶の「時系列」は、発心・修行・菩提・涅槃となる。今回取り上げた作品には、それぞれに創作への確かな「発心」があり、そして展開としての「修行」は定や三昧の深化よりも実存的な群像劇であり、人間的な言葉や行動の応酬がある。その先の菩提と涅槃が描かれないのが、出家者でない作家たちには応分とも言えるが、かつては輪廻や因果が担っていた仏教の「物語」としての強度や関心が、極めて現世的な領域へ移ろっている点は見逃せない。

舞台装置としての「現世・今生」において僧侶・宗教者が、宗教の全体性に頼ることなく、個として(孤ではない)どのように志向し、汚泥不染の行実を為せるのか。発心と修行にどれだけの「リアル」を託せるのか。現代に求められる我々の物語はこの点に集約されるように思う。